

and their phytogeographical significance K. SV. Vet. Handl. 19 No. 2 4) 早田文麿 (1933) : 植物分類學上: 566-567 5) Hu, H.H (1946) : Notes on a palaeogyne species of *Metasequoia* in China. Bull. Geol. Soc. China 26 105-107 6) Liang, H. etc. (1948) : Properties of a living fossil wood (*Metasequoia*). Wood Technology 1 Nat. Cent. Uni. Nanking 7) Miki, S. (1938) : On the change of flora of Japan since the upper Pliocene and the floral composition at the present Jap. Jour. Bot. 9 213-251 8) Miki, S. (1941) On the change of flora in Eastern Asia since Tertiary Period (1) Jap. Jour. Bot. 11 237-333 9) 三木茂 (1948) : 鮮新世以來の近畿並に近接地域の遺體フロラに就いて 鐵物及地質第9集 105-144 10) 三木茂 (印刷中) 鮮新世以來の邦産遺體植物の研究 自然と分化第一巻 65-115 11) 三木茂 (1949) *Metasequoia* に就いて 最近の生物學 一卷 299-311 12) Ogura, Y. (1932) : On the structure and affinities of some cretaceous plants from Hokkaido Jour. Fac. Sci. Uni. Tokyo Sec. 3, 2, part 7 13) Seward, A.C. (1919) Fossil plants' 4; 335 14) Seward, A.C (1933) : Plant life through the ages 15) 島倉巳三郎 (1933-1937) 化石木に關する研究雜記 (1-V) 地質學雜誌 40-44 16) 亙理俊次 (1949) 第3回日本植物學會大會講演

○ソメキヨシノに就て “ソメキヨシノは今もつて原産地が不明である。明治の初年に上野公園内精養軒の前通りに植えられた一風変わった櫻を藤野寄命君が調べて見ると、染井から來たものであると言うので、同君が花戸の称に染井を冠してソメキヨシノと命名したのである。(本誌3第1号「染井吉野ハ誰レガ命ゼン櫻ノ名カ」を参照) Wilson はヒガンザクラ (実はウバヒガン) とオホシマザクラの合の子であろうと言っているが、これは誰か実際に証明して見なければならぬ。それには染色体を調べて見るのもよからうが、実際に合の子を作つて見るのもよい。ソメキヨシノは樹によつて実の多く出来るのとそうでないのがある。興津の試験場にあるのは、実が多くなるたちのものだ。いつかそこで、樹の下に沢山実が落ちているのを見たことがある。播いても生えないものが多いと思うが、廣い所で何万本も苗を仕立てて調べたらどうであろうか。自分の代に花を見ることが出来なければ、子供の代に見ればよい。尤も葉だけでも區別がつくかも知れないから、そうならば簡単である。いつか小泉源一君が濟州島の山の中で採つた標本を見たが、ソメキヨシノによく似てはいるが、やはり少し違う様に見つた。”

(牧野先生一夕話 IV—文責在編輯)